

学校だより

桜水だより

須賀川市立第一小学校

28年度 第 29号

No.226

平成28年10月21日

☎75-2851

第64回福島県PTA研究大会郡山ブロック大会その2 記念講演

記念講演は、詩人である和合亮一様でした。和合様は、中原中也賞、みんゆう県民大賞、NHK東北文化賞などを受賞されておられるそうです。

福島から言葉の橋をかけて

詩人 和合 亮一 様

- 何気ない一言が「心に刻まれた」経験は誰にでもある。良い一言もあり、けなされた一言もある。ほんの一言でも重いものもある。
- 柏屋にある「青い窓」というフリーペーパー。心動かされる作品が多い。詩を読むだけでその場面が浮かんでくる。気に入った作品をノートに書き写し、繰り返し読んでみることをお勧めする。
- 子どもたちに星空や自然を感じ取ってほしい。風と土は時代が変わっても心動かされる。コンビニは「便利」であるが、震災後すぐに「便利」でなくなってしまった。
自然と母。子どもたちの心を揺らす対象である。父を対象とした作品より、母が多い。
- 「眼聴耳視」とは、眼で聴き、耳で視ること。青い窓を主宰した佐藤先生の言葉である。子どもたちの作品を読むとき、「眼聴耳視」がないと、その子の心までは読み切れない。
- 心動かされる作品には、辛いことを描いたものもある。それを書いた子は、その辛い社会と向き合っている。それを乗り越えようとしているのである。だから心動かされる。
- 震災から5年半。この5年半は、大人も子どもも同じ時を過ごしてきた。
「ありがとう」の詩。「文房具ありがとう。大切にします。・・・おじいちゃんを見つけ
てくれてありがとう。お別れができました。」
家族は、見つけれないと「さびしくなることもできない」ことがわかる。
- 鬼剣舞（おにけんぱい）に挑戦している。鬼は辛さや悲しみを表現し、人々がそれを乗り越えていくのではないか。奉納する言葉（詩）を作り始めた。言葉の回りに人が集まってきた。いろいろな対話が始まった。
- 言葉を巡って対話をする。その姿を見て、子どもたちも対話を始めていく。それこそが文化なのである。
- 遠い昔。村での寄り合いは社（やしろ）でもなされた。人々が社に集まり、対話を始めていく。そして、村の文化が創られていった。
お「社」で「会」う。それが「社会」なのではあるまいか。

和合様は子どもたちの詩を朗読され、それに基づいて気づかれたことを話されました。朗読された詩はどれも目頭が熱くなるような作品やその子の思いが強く伝わるような作品ばかりでした。